

最近、この連載を読んで下さっている方の視線が気になりました。というのも、この頃は自分でも何を書いているのかますます分からなくなってきたからだ。そこで、今回はこれまでの連載を振り返って、私自身が今感じている「おふでさき」読解の“困難さ”と、それを踏まえて学んだことを記したい。

当連載を「おふでさき」の有機的展開」と名付けた理由は、「おふでさき」を読んで単に知的欲求を満たすのではなく、そこに込められた神意を自分自身の生活の上に現して、あたかも「おふでさき」が生命を得て、私（読む者）を媒介にして世の中に展開していく様を念願したからである。しかし、振り返ると、そうした自分の意図とは裏腹に、連載当初はまったく反対のことをしていたように思う。つまり、私を媒介にして「おふでさき」が展開するのではなく、「おふでさき」を媒介にして“私の考え”を展開させようとしていた。そこで、連載の途中から、それまでのように「おふでさき」を応用的に理解するのではなく、まず「おふでさき」自身が何を語っているのかを理解しようとしてきた。いわゆる外在的理解から内在的理解への移行である。

そして、最近では「おふでさき」を同義語反復的・翻訳的に読解するに至り、たとえば「よろづよ」とは「万世」なのかあるいは「万代」なのかと言葉の“意味的な言い換え”に関心が向くようになった。それは「おふでさき」の言葉が担う意味内容を、その内容を保ちながら他の言葉に担わせる試みである。

たとえば、「よろづよ」が「万世」か「万代」と考えるときに、「世」であれば「世界」を連想させる空間的イメージとなり、「代」となれば「代々」を連想させる時間的イメージとなる。実際には、「よろづよ」は平仮名なので、どっちとも言える。しかし、直後に「のせかい」と続くことを考えれば、「万世の世界」では空間的なイメージが重複して時間的なイメージが欠落してしまうので、「万代の世界」という言葉のほうが「よろづよのせかい」に含まれる意味内容をカバーしていると言える。さらには、「古今東西」という四字熟語は時間・空間ともに表現しており、現代語としては「よろづよのせかい」が一番近いであろう。しかし、当然、「せかい」は「せかいいちれつ」と続くので、「古今東西」もまたそれに応じて検討しなければならない。

さて、このような解釈では当然音韻的な要素は除外されており、ひらがなを漢字に置き換えること、あるいは和歌体を散文体に書き換えることで“形式に付随する意味”を大きく犠牲にしているといえる。例えば、イスラムの聖典クルアーンはアラビア語の詩的な形式にこだわってその語感に神聖性を見出しており、教祖が“あえて”和歌体で記した「おふでさき」にもこうした可能性は当然考えられるし、それは話し言葉と書き言葉の違いまで含めて検討されなければならないだろう。

しかし、他方で、教祖は「おふでさき」を記しただけでなく“あえて”その身をもって教えを体現したことを鑑みると、「おふでさき」は親神の神意を伝える表現形式の一つであるとも言える。つまり、天理教の教理体系においては「原典」という概念より、「教祖」あるいは「ひながた」といった概念のほうが上位であり、「おふでさき」はそれだけで完結するものではない。とするならば、例えば、和歌体から散文体へと「おふでさき」

の表現形式を書き換える試みは、「ひながた」を辿るということの下位作業に留まる限りにおいて、一応の許可を得ることができるであろう。そして、当然、教祖直筆の「おふでさき」は「ひながた」を辿る上で最も重要な手がかりの一つであり、「おふでさき」が「ひながた」を下支えしているとも言える。

さて、このように一応は理解してみても、自分の現状を鑑みると、この「ひながた」と「おふでさき」とが支え合うという構図を感覚的に得ることが実際には大変難しい。これが当連載の根本的な問題である。たとえば、「ひながたを辿る」ことが掴めないままに、「おふでさき」を“解釈”してしまうと容易に言葉遊びに陥る。つまり、「よろづよのせかい」を「古今東西」に置き換える作業にはいつまでも「言い切れない」可能性が含まれており、すべてが言葉の海の中に浮いてしまうリスクが生じて、自己の抛り所も霧散してしまう。また、それでは言葉遊びに終わらないようにと「ひながたを辿る」ことを意識してはみるものの、それをたとえば「布教に歩く」というように単に「〇〇する」行為として捉えていると、当該の行為をしていない全てが否定されてしまい、やはり「ひながた」を逃していることになる。こうして「おふでさき」を読んでみても、いつしか自分の心の道の歩みが止まってしまうのである。

要するに、当初の①「おふでさき」の可能性を他の思想文脈において切り拓こうとする試み（外在的理解）では、「おふでさき」が言わんとすることと“私の考え”とが容易に混同されるという自己欺瞞に陥り、その反省から次に②「おふでさき」が言わんとすることを翻訳的（内在的）に理解しようと努めてきたが、それもいつしか内在的な意味よりも言葉を解釈することにこだわってしまい、結果として“信仰の抛り所”を見失った。そして、③「ひながた」を安易に「布教に歩く」行為として捉えた結果、ついには“私の信仰”をも見失うに至ったのである。そして、このように“私の考え”を捨てきれず、“信仰の抛り所”をいたずらにぼやかして、“私の信仰”を見失ったのは、結局、私が「おふでさき」の字面にとらわれて肝心の“親心”を受け取っておらず、また、布教の外見的行為にとらわれては“親心”を伝えることをしないで、いつしか精神のない言葉と行為の世界に埋没していったからであると思われる。

こうして振り返ると、ひながたを辿ること、あるいは信仰するということの核心の一つは、親心を“受け取る”ことではないかと思う。それは解釈ではなく探究であり、理解ではなく納得であり、受け取り方ではなく受け取る決心であって、課題は「どのように受け取るか」ではなく、より直接的に「受け取るか否か」だと言える。これは諸井慶徳先生が救済論で「直接性」と呼ぶものと関連するであろう。

受け取るといってもそれは決して受動的な態度ではなく、むしろ受け取ろうとしなければ“親心”は受け取れない。そして、この意味でいえば、布教するというのは親心を伝えるだけでなく、それを“受け取ってもらう”ことであり、思えばこれこそが「おふでさき」の大きな目的の一つであったと今更ながら感じる。「おふでさき」を読む上では、学問的な批判精神をも包含した“素直さ”が必要であることを学んだ。